

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02771

研究課題名(和文) 昭和40年代採録岐阜県方言談話資料作成とその分析

研究課題名(英文) Creation of the transcript data on Gifu dialects recorded in 1960s and its linguistic analysis

研究代表者

山田 敏弘 (YAMADA, TOSHIHIRO)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：90298315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：岐阜県方言に関する昭和40年代に採録された談話資料を20時間分文字データ化し、その分析を行った。その結果、通説として信じられていた岐阜県方言における条件表現には関西系の「タラ」でも方言形式の「ヤ・ヤ」でもなく「ト」が多く用いられていることを数量的に明らかにし、また、否定表現にも強意を含まない「ヘン」が多用されるなど、『方言文法全国地図』の否定に関する岐阜県内の調査結果を修正するデータが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、『方言文法全国地図』に記されているように、昭和中期の岐阜県方言においては、強意を含まない否定辞「ヘン」は使用されないという証拠しかなかったが、実際の談話資料を分析することで、多くの否定辞「ヘン」が、強意を含む場合の他にも、また強意を含まない場合に「ン」と併用されていることを、実際の会話データから、県内地域別に、また多数の話者のデータにより数量的にも明らかにすることができ、半世紀前の岐阜県方言の実態を正しく掴めるようになった。このように本研究は、過去の方言調査の結果を検証する上でも重要な価値をもつものである。

研究成果の概要(英文)： Creating the transcript data of 20 hours on Gifu dialects, recorded in 1960s, the linguistic analysis brought us the following facts among others. One is on connection particles for conditionals, which has been believed that the most used form was 'tara' as in Kansai dialects, but the fact that 'to' was revealed the most utilized form as in Tokyo dialect. Another is on the negative forms that 'hen' of Gifu dialects have been regarded as an intensive form but the fact was that it was used as non intensive form already in 1960s. The transcript data obtained in this research brought us new findings on Gifu dialects.

研究分野：岐阜県方言

キーワード：岐阜県方言 談話資料 文法形式

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 岐阜県内の方言記述は、20世紀、他県に比べ格段に遅れていた。このことは、1960年代に岐阜大学に奉職し『岐阜県方言の研究』も編まれた奥村三雄氏が退職された後、県内の大学に岐阜県方言を専門とする研究者がいなかったことに主としてよるものである。

もちろん、岐阜県方言に関する研究はあり、また方言に関する刊行物も種々出版されてはいたが、県内の方言語彙をまとめた辞典は、県内の一地域に限定されたものが多く、また数量的にも限られていた。そこで、本科研申請者は、科学研究費基盤研究(C) (課題番号 23520549)において、総異なり項目数 5,909、のべ 31,777 項目を含む 5 冊の辞典を刊行し、さらに科学研究費基盤研究(C) (課題番号 17K02771)において、隣県と連続した 850 枚の地図を描くことで岐阜県方言語彙・文法形式の分布を捉えやすくし、語彙・文法形式については、おおよそ一定の知見を岐阜県民を中心に還元できる状態に整えた。

(2) 一方で、方言として記述されるのは、人々の「意識」にある言語である。実態とはずれていることも多々ある。その「実態」は、どのようにしたら記述できるか。それは、無意識の談話を書き起こす(文字化する)ことである。言語研究では、辞書と文法記述と談話資料があれば、言語記述は完成すると言われている。岐阜県方言に関しては、この方言談話資料が手薄であった。

幸い、岐阜県図書館に昭和 40 年代前半に録音された『飛騨・美濃古老の思い出話』の音声データが 100 時間超、保管されていることを知り、特別に貸し出ししてもらえることになったため、この方言談話資料を書き起こすことで、半世紀前の岐阜県方言の実態を知ることができるようになると思った。

本研究は、語彙・文法形式の記述から、実際の話しことばとしての方言談話資料の作成を意図して開始された。

### 2. 研究の目的

2つの段階での研究を目的として、本研究は計画された。

#### (1) 談話資料の整備

岐阜県図書館所蔵『飛騨・美濃古老の思い出話』には、100 時間もの音声資料が、平成の大合併以前に岐阜県内に存在した 99 の市町村ほぼすべてを網羅する形で残っている。多くの全国的調査では、県内でせいぜい数カ所、多くても 10 箇所には届かない。その音声データをもとに方言談話資料を整備することが第一の目的である。

#### (2) 談話資料の分析

談話資料は、文字データ化することで格段に分析しやすくなる。この文字化されたデータを用いて、特に終助詞や理由を表す接続助詞等、付属語の特徴、待遇意識と待遇表現の運用の関連性、他者を否定する発言など地域特有の言語行動性に着目して、岐阜県方言の特徴を分析することを第二の目的とした。

この中で、**は**、談話形式とは言え、文法研究の延長上にあり、比較的研究も進んでいる一方、それらは意識の上での分析であり、実態がどうであるかを検証することが必要である。本研究で得られたデータは、このような分析にも有益である。

また、**は**、固定的な身分による待遇差とそれに応じた表現の選択もあるが、言い出しにくいことを言うときの配慮などは、まだ分析が十分には進んでいない。このような点についても、談話資料を分析する必要がある。

さらに、**に**についても、印象として語られる岐阜県方言話者の「ひがみっばさ」を、具体例を挙げる形で検証することも必要である。

録音データであるから音声的な特徴についても分析可能な部分もあると考え、音声的特徴についての分析も、副次的な目的とした。

### 3. 研究の方法

当初計画された研究方法は、下記の 4 点であった。

岐阜県図書館に保管されている「飛騨美濃古老の思い出話」(CD 全 110 巻、昭和 43-45 採録 = 非公開) という音声データから、文字化資料を作成する。

**を**を用いて、どのような地域でどのような人がどのような終助詞や接続助詞を用いるかから、嫌みを言う頻度などまで、談話的特徴の分析をおこなう。

研究者対象の談話音声データと文字化資料とをリンクさせた資料を作成する。話者遺族の許可が得られたものについては、一般公開する。

資料を用いた「岐阜県人方言イメージアップ作戦」を実施する。

実際、 については、著作権の同意が得られた談話資料がなかったため、公開できなかった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 音声データの文字化

本研究期間においては、原音声資料 100 時間分の中から、飛騨、東濃、中濃・岐阜地域を中心に下記の 10 地点の音声データ約 20 時間分の文字化を達成した。最初の番号は資料番号、最後の数字は文字数（ト書き部分を含む）である。

01	恵那郡山岡町	509	文字
02	多治見市妻木	9736	
12	岐阜市長森野一色	28478	
14	岐阜市加納清水町	28899	
16	各務原市上戸町	5940	
18	岐阜市長良南陽町	33795	
21	吉城郡上宝村本郷	39087	
68	本巣郡穂積町十九条	10843	
77	関市小瀬	639	
82	美濃市常盤町	17917	

文字数の多寡は、当然、原資料の長短もあるが、音質が十分に良好でなく、聴き取れないこともあったためである。

およそ 165,000 字、少なく見積もっても A4 で 130 ページ超（一般に公開されているデータであれば 200 ページ相当）の文字データである。岐阜県全般を見渡し、方言に関してこれほど膨大な談話資料は得られておらず、今回作成された談話資料が県内最大の資料となった。

表記は、最初、すべて片仮名で音声表記を試みたが、現実的に分析がしにくく感じられたため、その後、漢字仮名交じり文での表記に統一した。

##### (2) 文字化資料の公開

科研費という公的資金を得て整備したデータであるため、公開が原則であると心得ているが、公開の可否について、資料を保管する岐阜県図書館と相談した。

結果としては、著作権は依然として原話者かその遺族にあり、その承諾が必要ということになった。原話者の情報は、個人情報であるので教えられないということであり開示は認められなかった。

そのため、録音当時の電話帳から大まかな町名をたよりに、まず旧恵那郡話者から調べてみたが、ほとんどたどり着くことができなかった。

文字化資料の公開は、現在のところ諦め、将来、著作権の期限が切れたころに活用できるように、現在は下記の分析用として限定して用いている。

##### (3) 文字化資料の分析

当該科研費の期間に、この資料について 2 本の論文を公表した。

「飛騨美濃古老の思い出話」の方言資料的価値 1（『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』67 巻 1 2019）では、当該資料の話者データ、含まれる話の内容、資料の分量（時間）を一覧としたものを作成した。所蔵する岐阜県図書館にもないデータである。

また、この分析により、この「飛騨美濃古老の思い出話」の内容をまとめた岐阜県図書館(1970)『山と水に生きる 中・西濃篇』および同(1971)『山と水に生きる 東濃・飛騨篇』の 2 巻に収められていない音声データも多数あることが判明した。実に、CD に録音されただけで内容だけでも公開されるにいたらなかったデータ 29 話者分が、活字化されないで終わっている。

反面、活字化されているが音声データの残っていない話も、特に西濃地域南部を中心に多く存在することも判明した。

編纂された本だけを見ていたのでは分からない談話資料の総体が確認された。

もう 1 本は、「飛騨美濃古老の思い出話」の方言資料的価値 1（『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』68 巻 1 2020）である。ここでは、まず著作権処理について考察した。これら資料が、当時、後世に残すべき重要な資料であるという意識が希薄であり、将来的な音声データの公開に備えた権利関係の整備が行われてこなかったことを指摘し、音声資料が手軽に扱えるようになった今日でも、その音声は遠く昔日のものとして留め置かれることになっていることも、本論文では、まず考察の前提として資料の利用を「引用」の範囲に留めることを述べ、8 地点の資

料から文法的特徴を中心に分析した。

#### 原因・理由を表す接続助詞

岐阜県内では、原因・理由を表す場合に、「デ」が用いられることが多く、「雨降ルデ、早ヨ家出タ」や「待ットタルデ、早ヨ来ヤー」のように用いられる。しかし、実際にこの「デ」は、「モンデ」「モンヤデ」など、形式名詞「モン」を含む形式に置き換わることも多い。単純に、どのような形式が存在するかだけでなく、どのような文脈でどの形式が用いられやすいかについて、具体的な音声資料から見ておく必要がある。

この点について、書き起こした談話資料から探り、次のようなことがわかった。

- ・東濃地方では、接続助詞の「デ」は、原因・理由を表す接続助詞としてよりも、終助詞的に共通語の「～からね。」を表す「デナ。」として用いられることが多い。
- ・代わりに、東濃地方では、原因・理由を表す接続助詞として「モンデ」がもっとも多く使われ、「モンヤデ」も一定数確認された。
- ・東濃地方では、「雨降ルニ、傘持ッテキヤー。」のように、後件に働きかけのモダリティを要求する順接の「ニ」が見当たらない。
- ・一方、飛騨地方では、「モンデ・モンヤデ」の使用が限定的で、「デ」が数量的には多く用いられている。岐阜市資料でも、「デ」が多い。

このように、地域差があることが指摘できた。

#### 条件を表す接続助詞

「と」「ば」「たら」「なら」に代表される条件を表す接続助詞は、関東で「ば」、関西で「たら」がもっとも多く使われることが知られている。岐阜県内は、一般に文法形式や語彙の点で、関西系の形式が多く使われるが、談話資料から分析すると、岐阜市資料では「ト」が84例、「タラ」が19例、方言形式としてよく挙げられる「ヤ/ヤ」が5例と、圧倒的に「ト」が多く用いられていることがわかった。さらに、この時代、「トサイガ」のような形も一定数(岐阜市資料で4例)確認できることも指摘した。

話者の内省に頼る方言研究では、方言の実態を正確に把握できていないことが指摘された。

#### 否定辞

否定形式については、岐阜市の西隣にある旧日本巣郡穂積町のデータで、圧倒的に「ン」が用いられ、「ヘン」は限定的であった。このことは、『日本言語地図』に示された、「岐阜県内では否定辞として強意を込めないヘンは見られない」との結果が、あながち間違っていないことを示している。

一方で、東濃地域では、強意を込めない「セン・ヘン」が全体の1/3ほど用いられており、必ずしも西から関西で主流の否定辞「ヘン」という方言語形が広がったとは考えにくいことが指摘できた。さらに多くの地点の談話データを分析することで、強意の意味を含まない「ヘン」が、この時代にどのように広まっていったかを知る手がかりとなると予想される。

#### 談話形式

「あの」や「その」などフィラーのような談話形式こそ、談話資料分析を調べてはじめてわかる言語形式である。岐阜県内では「ソラ(それは)」のほか、「ナンヤシャン」が不明なことを述べる際に多用されることなどが指摘された。

また、「ドー」を、聞き手の発話に対して気遣う標識として、「ムカシワ ○○モ エラカタデナ」に対して、「ドー ○○サンデモヤ」のように用いることが指摘できた。

以上のように、談話分析をすることで、辞書には記載されない方言的特徴を多く拾い集めることができた。談話資料の公開はできなくとも、談話資料を書き起こすことで分析しやすくなり、そこから方言的特徴を読み取り記述を厚くしていく。このような研究を行ってきた。

残った資料は、次の科研費でも書き起こしに取り組み、さらに別の録音資料群も合わせて県内のより多くの地点の方言的特徴を詳細に記述していくことにつなげたい。

#### (4) 岐阜県人方言イメージアップ作戦

研究して終わりでは、その知見を十分に活かすことができない。前回の科研の成果である語彙形式の研究及び本研究の談話の運用は、週1回の中日新聞コラムをはじめ、不定期の講演会にて県民に広く還元している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山田敏弘	4. 巻 68-2
2. 論文標題 「飛騨美濃古老思い出話」の方言資料的価値 2	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田敏弘	4. 巻 67-1
2. 論文標題 「飛騨美濃古の思い出話」の資料的価値 1	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田敏弘	4. 巻 67-2
2. 論文標題 「半分、青い。」の岐阜東濃方言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田敏弘	4. 巻 66-2
2. 論文標題 美濃飛騨方言の境界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田敏弘	4. 巻 3
2. 論文標題 方言地図から見る岐阜県方言	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 リプロ岐阜学 岐阜の自然・文化・芸術 2	6. 最初と最後の頁 56-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 山田敏弘
2. 発表標題 方言授業実践から見てきたこと
3. 学会等名 実践方言研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田敏弘
2. 発表標題 授受表現にヴォイスを絡めて
3. 学会等名 イタリア日本語教師協会Seminaro Aidlg2021 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 張麟声編著・勝川裕子・杉村博文・橋本修・丸尾誠・山田敏弘著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日中言語文化出版社	5. 総ページ数 21
3. 書名 中文日訳の基礎的研究 (一)	

1. 著者名 山田敏弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岐阜大学	5. 総ページ数 480
3. 書名 岐阜県方言辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------